

**[A年] 聖霊降臨節第15主日(2021年8月29日)****【旧約聖書日課】 列王記上3章4～15節**

<sup>4</sup>王はいけにえをささげるためにギブオンへ行った。そこに重要な聖なる高台があったからである。ソロモンはその祭壇に一千頭もの焼き尽くす献げ物をささげた。<sup>5</sup>その夜、主はギブオンでソロモンの夢枕に立ち、「何事でも願うがよい。あなたに与えよう」と言われた。<sup>6</sup>ソロモンは答えた。「あなたの僕、わたしの父ダビデは忠実に、憐れみ深く正しい心をもって御前を歩んだので、あなたは父に豊かな慈しみをお示しになりました。またあなたはその豊かな慈しみを絶やすことなくお示しになって、今日、その王座につく子を父に与えられました。<sup>7</sup>わが神、主よ、あなたは父ダビデに代わる王として、この僕をお立てになりました。しかし、わたしは取るに足らない若者で、どのようにふるまうべきかを知りません。<sup>8</sup>僕はあなたのお選びになった民の中にいますが、その民は多く、数えることも調べることもできないほどです。<sup>9</sup>どうか、あなたの民を正しく裁き、善と悪を判断することができるように、この僕に聞き分ける心をお与えください。そうでなければ、この数多いあなたの民を裁くことが、誰にできましよう。」

<sup>10</sup>主はソロモンのこの願いをお喜びになった。<sup>11</sup>神はこう言われた。「あなたは自分のために長寿を求めず、富を求めず、また敵の命も求めることなく、訴えを正しく聞き分ける知恵を求めた。<sup>12</sup>見よ、わたしはあなたの言葉に従って、今あなたに知恵に満ちた賢明な心を与える。あなたの先にも後にもあなたに並ぶ者はいない。<sup>13</sup>わたしはまた、あなたの求めなかったもの、富と栄光も与える。生涯にわたってあなたと肩を並べうる王は一人もいない。<sup>14</sup>もしあなたが父ダビデの歩んだように、わたしの掟と戒めを守って、わたしの道を歩むなら、あなたに長寿をも恵もう。」<sup>15</sup>ソロモンは目を覚まして、それが夢だと知った。ソロモンはエルサレムに帰り、主の契約の箱の前に立って、焼き尽くす献げ物と和解の献げ物をささげ、家臣のすべてを招いて宴を張った。

**【使徒書日課】 コリントの信徒への手紙一15章35～52節**

<sup>35</sup>しかし、死者はどんなふうに復活するのか、どんな体で来るのか、と聞く者がいるかもしれませんが。<sup>36</sup>愚かな人だ。あなたが蒔くものは、死ななければ命を得ないではありませんか。<sup>37</sup>あなたが蒔くものは、後でできる体ではなく、麦であれ他の穀物であれ、ただの種粒です。<sup>38</sup>神は、御心のままに、それに体を与え、一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになります。<sup>39</sup>どの肉も同じ肉だというわけではなく、人間の肉、獣の肉、鳥の肉、魚の肉と、それぞれ違います。<sup>40</sup>また、天上の体と地上の体があります。しかし、天上の体の輝きと地上の体の輝き

とは異なっています。<sup>41</sup>太陽の輝き、月の輝き、星の輝きがあって、それぞれ違いますし、星と星との間の輝きにも違いがあります。

<sup>42</sup>死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、<sup>43</sup>蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。<sup>44</sup>つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。<sup>45</sup>「最初の人アダムは命のある生き物となった」と書いてありますが、最後のアダムは命を与える霊となったのです。<sup>46</sup>最初に霊の体があったわけではありません。自然の命の体があり、次いで霊の体があるのです。<sup>47</sup>最初の人には土ででき、地に属する者であり、第二の人は天に属する者です。<sup>48</sup>土からできた者たちはすべて、土からできたその人に等しく、天に属する者たちはすべて、天に属するその人に等しいのです。<sup>49</sup>わたしたちは、土からできたその人の似姿となっているように、天に属するその人の似姿にもなるのです。

<sup>50</sup>兄弟たち、わたしはこう言いたいのです。肉と血は神の国を受け継ぐことはできず、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐことはできません。<sup>51</sup>わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今は異なる状態に変えられます。<sup>52</sup>最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。

**【福音書日課】 マタイによる福音書13章44～52節**

<sup>44</sup>「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。<sup>45</sup>また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。<sup>46</sup>高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。<sup>47</sup>また、天の国は次のようにたとえられる。網が湖に投げ降ろされ、いろいろな魚を集める。<sup>48</sup>網がいっぱいになると、人々は岸に引き上げ、座って、良いものは器に入れ、悪いものは投げ捨てる。<sup>49</sup>世の終わりにもそうなる。天使たちが来て、正しい人々の中にいる悪い者どもをより分け、<sup>50</sup>燃え盛る炉の中に投げ込むのである。悪い者どもは、そこで泣きわめいて歯ぎりするだろう。」

<sup>51</sup>「あなたがたは、これらのことがみな分かったか。」弟子たちは、「分かりました」と言った。<sup>52</sup>そこで、イエスは言われた。「だから、天の国のことを学んだ学者は皆、自分の倉から新しいものと古いものを取り出す一家の主人に似ている。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 列王記上3章4～15節

4王はいけにえをささげるためにギブオンへと行った。そこには最も重要な高さ所があったからである。ソロモンはその祭壇の上で、一千頭の焼き尽くすいけにえを献げた。5その夜ギブオンで、主は夢の中でソロモンに現れた。「願い事があれば、言いなさい。かなえてあげよう」と神は言われた。6ソロモンは答えた。「あなたは、あなたの僕である父ダビデに、大いなる慈しみを示されました。彼が真実と正義と正直な心をもって御前を歩んだからです。あなたはこの大いなる慈しみを守り続け、今日、その座に着く子を与えられました。7わが神、主よ、この度、あなたは父ダビデに代わって、この僕を王とされました。しかし、私は未熟な若者で、どのように振る舞えばよいのか分かりません。8僕はあなたがお選びになった民の中の一人ですが、民は多く、その多さのゆえに数えることも調べることもできません。9どうか、この僕に聞き分ける心を与え、あなたの民を治め、善と悪をわきまえることができるようにしてください。そうでなければ、誰がこの数多くのあなたの民を治めることができるでしょうか。」

10ソロモンが願ったことは、主の目に適う良いことであった。11神は言われた。「あなたが願ったのは、自分のために長寿を求めることでもなく、富を求めることでもなく、また敵の命も求めることでもなかった。あなたがた願ったのは、訴えを聞き分ける分別であった。12それゆえ、あなたの言うとおりに、知恵に満ちた聡明な心をあなたに与える。あなたのような者は、前にはいなかったし、この後にも出ないであろう。13私はまた、あなたが求めなかったもの、富も栄誉も与えよう。生涯にわたり、王の中であなたに並び立つような者は一人もいない。14父ダビデが歩んだように、あなたが私の掟と戒めを守り、私の道を歩むなら、私はあなたに長寿を与えよう。」

15ソロモンが目覚ましてみると、それは夢であった。ソロモンはエルサレムに戻り、主の契約の箱の前に立ち、焼き尽くすいけにえと会食のいけにえを献げ、すべての家臣のために宴会を開いた。

## コリントの信徒への手紙一15章35～52節

35しかし、死者はどのように復活するのか、どのような体で来るのか、と聞く者がいるかもしれません。36愚かな人だ。あなたが蒔くものは、死ななければ命を与えられることはありません。37あなたが蒔くものは、後にできる体ではなく、麦であれ他の穀物であれ、ただの種粒です。38神は、御心のままに、これに体を与え、一つ一つの種にそれぞれ体をお与えになります。39どの肉も同じというわけではなく、人間の肉、獣の肉、鳥の肉、魚の肉と、それぞれ違います。40また、天上の体もあれ

ば、地上の体もあります。しかし、天上の体の輝きと地上の体の輝きとは異なっています。41太陽の輝き、月の輝き、星の輝きと、それぞれ違いますし、星と星の間にも、輝きに違いがあります。

42死者の復活もこれと同じです。朽ちるもので蒔かれ、朽ちないものに復活し、43卑しいもので蒔かれ、栄光あるものに復活し、弱いもので蒔かれ、力あるものに復活し、44自然の体で蒔かれ、霊の体に復活します。自然の体があるのですから、霊の体もあるわけです。45聖書に「最初の人アダムは生きる者となった」と書いてありますが、最後のアダムは命を与える霊となりました。46つまり、霊のものではなく、自然のものが最初にあり、それから霊のものがあるのです。47最初の人には地に属し、土からできた者ですが、第二の人は天に属する方です。48土からできた者たちはすべて、土からできたその人に等しく、天上の者たちはすべて、天上のその方に等しいのです。49私たちは、土からできた人のかたち〔→僕〕を持っていたように、天上の方のかたちをも持つようになります。

50きょうだいたち、私はこう言いたいのです。肉と血は神の国を受け継ぐことはできません〔別訳→私がこういうのは、肉と血が神の国を受け継ぐことはできないからです〕。また、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐこともありません。51ここで、あなたがたに秘義〔→神秘〕を告げましょう。私たち皆が眠りに就くわけではありません。しかし、私たちは皆、変えられます。52終わりのラッパの響きとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴り響くと、死者は朽ちない者に復活し、私たちは変えられます。

## マタイによる福音書13章44～52節

44「天の国は、畑に隠された宝に似ている。人がそれを見つけると隠しておき、喜びのあまり、行って持ち物をすっかり売り払い、その畑を買う。」

45また、天の国は、良い真珠を探している商人に似ている。46高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。

47また、天の国は、海に卸して、いろいろな魚を囲み入れる網に似ている。48網がいっぱいになると、人々は岸に引き上げ、座って、良いものを器に集め、悪いものは投げ捨てる。49世の終わりにもそうなる。天使たちが来て、正しい人々の中から悪い者をより分け、50燃え盛る炉に投げ入れる。彼らは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」

51「あなたがたは、これらのことがみな分かったか。」弟子たちは、「分かりました」と答えた。52そこで、イエスは言われた。「だから、天の国のことを学んだ学者は皆、自分の倉から新しい物と古い物を取り出す一家の主人に似ている。」

**黙想のためのノート****次主日教会暦と聖書日課について**

・8月29日「聖霊降臨節第15主日」の日課主題は「究極の希望」。福音書日課は、「マタイによる福音書」から前週日課に続く箇所、一連の「天の国のたとえ」を終結する部分。旧約日課は、「列王記上」から、ソロモンが父王ダビデの後継として王権を得た後、地方聖所での犠牲奉獻執行によって支配権を誇示する中で、夢枕の内に神の前に立ったことを伝える逸話箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙一」から、死者の復活についての説明を試みている箇所。

**旧約日課(列王記上3章より)**

・「列王記」は、ダビデ王崩御から王国分裂、南北両王国の滅亡までの「王国史」として構成され、ユダヤ正典「前の預言者」の最後に置かれることによって、「ヨシュア記」から「列王記」までのカナン定住時代の「イスラエル正史」の最終巻を構成している。上・下巻に分けて扱われているが、元来は一卷の書として作成されたもの。

・日課箇所は、ソロモン王が王権確立を宣布する目的で支配地各所の聖所で犠牲奉獻を執行したことに際して、夢枕の内に神の前に立ったとされる逸話を伝える箇所。おそらく、元来の「ソロモン伝承」では、ソロモンの王権が神からも承認を与えられたことを示す出来事物語りとして成立し、「ダビデ王家正史」に位置づけられるものとして伝承されていたのだろう。「列王記」編者は、これを、「ダビデ物語」の場合と同様に、ソロモン王が「申命記」など「律法」に忠実な王であったことを示す逸話として再編集したものと考えられる(15節)。

・4節「ギブオン」は、ベテルに近い町で、かつてヨシュアがイスラエルの民を率いてヨルダン川を渡りカナン定住を進めた際、他の町に先駆けて真っ先にイスラエルと同盟関係を結ぶようになったとされる(ヨシュア9~10章)。ベニヤミン族の領域に位置し、サウル王家と関係が深いと考えられる。おそらく、ダビデ王家内の王位継承闘争に勝利したソロモン王一派が、かつてのサウル王家支配域の北部一帯、すなわち「イスラエル」に対する支配権を示すために、ギブオンに向いて「王位宣言」としての犠牲奉獻儀式を執行したのだろう。

・この出来事を、「列王記」編者は、飽くまで「夢」の中でのことであったと強調している(5節、15節)。「夢」が神の託宣を受ける手段であることは、「創世記」のヤコブ(28章)やヨセフ(37章以下)の例にもあるように、決して否定されるものではない。しかし、「列王記」編者は、そのような超常的な神との交流をソロモンの権威付けに用いることに積極的ではないのかもしれない。すなわち、ソロモンは、その夢を見た後、ただちにエルサレムに帰還して「主の契約の箱」の前に立ったとされるのである。

**使徒書日課(コリ15章より)**

・「コリントの信徒への手紙一」は、使徒パウロが自ら創設に関わったコリント教会に宛てて記した一連の書簡の一つで、比較的初期のものと考えられる。コリントは、アテネに近いペロポネソス半島の付け根に位置するギリシア随一の地中海貿易の中継港湾都市で、ユダヤ人も比較的多く居住していたと考えられるが、必ずしも定住者ばかりではなかったとも推察される(たとえば、「使徒言行録」18章が伝えるところによれば、コリント伝道の協力者として名の挙げられているユダヤ人夫妻のアキラとプリスキラは、「ローマ書」によればローマ教会のメンバーにも挙げられている)。そのような地域性から、コリント教会は比較的オープンで自由な雰囲気のある教会として形成され、パウロの後に来訪したアポロやケファ(ペトロ)などの宣教者の影響を受けた者など、多様な考えの信者によって構成されるようになっていたと考えられる。文化的にはアテネに近いこともあり、おそらくギリシア・ローマ文化思想の影響が強かったと考えられ、パウロが本書簡で取り上げる問題も、他書簡と比べて独特固有の課題意識が見て取れる。特に、日課箇所を含む15章は、諸教会で共有された「復活顕現伝承」の確認から始められているにもかかわらず、「復活」そのものについての正否を問うような問題に答えを示そうとパウロが苦心していることがわかる。おそらく、ギリシア・ローマ文化思想で広く流布していた「霊肉二元論」に基づく「靈魂不滅説」が信者の間で無意識のうちに前提とされ、パウロらが「復活顕現伝承」に基づいて教えていた「復活理解」とは異なる復活論、あるいは復活否定論が、教会内で混乱を招いていたのだろう。それに対して、ユダヤ的伝統に基づいてではなく、ギリシア・ローマ的言説を用いて、パウロは、説明を試みているのが、日課箇所に至る部分である。

・復活を説明するのに、「種が蒔かれると、それとはまったく異なる姿のものが生長してくる」というたとえを用いる例は、「ヨハネ福音書」12章で、主イエスがギリシア人に向けて語られたという言葉、「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」(ヨハネ12:24)の類例と言える。このような生命論的な「復活」理解は、「新約」各書で必ずしも求められているものではない。多くの場合、「復活」は、社会論的な理解(社会的疎外の克服、共同性の回復、破綻した関係の和解、など)の中に位置づけられているのである。主イエスや初代教会の使徒たちが取り組んだのは、このような課題に対する解としての「キリストの復活」信仰であったのだろう。しかし、ユダヤ人社会では「終末の復活」信仰が広く知られており、両者が結びついたとき、「復活」は、個々人の存在に関わる問題として、生命論的な説明をも求められるようになったものと考えられる。日課箇所は、そのような課題への取り組みだが、必ずしも成功していない。

**福音書日課(マタイ 13 章より)**

・日課箇所は、「種を蒔く人のたとえ」から始まる一連の「天の国のたとえ」の枠組みの終結部にあたる。この枠組みは、「マルコ福音書」を踏襲したものと考えられるが、「マタイ福音書」は、「毒麦のたとえと説明」を大胆に挿入するとともに、独自の「天の国のたとえ」を付加することによって、「マルコ福音書」が「主イエスがたとえで語られたこと」自体に焦点を当てていたのに対して、「天の国の教えを学ぶこと」へと焦点を移そうとしていると考えられる。日課箇所の終わり 51~52 節は、そのことを明示するものとなっている。

・日課箇所には、三つの短い「天の国のたとえ」が置かれて、「本物の良いものを見いだすこと」の価値が強調されている。ただし、三つのたとえが構造的に一致しているわけではなく、見いだされるべきものとして推認される対象の違いは明らかにある。すなわち、最初のふたつのたとえでは、「人が良いものを見いだすこと」に焦点があると考えられるが、三つ目のたとえでは、終末論的な解説が加えられて「終末に神が見いだしてくださる人間」に焦点が移されていると考えられる。前段の「毒麦のたとえの説明」にも見られるように、「マタイ福音書」は、全体として終末論的な解釈に焦点を合わせようとしている傾向があるので、三つのたとえを通して最後の終末論的な解説で説明しようとしているのかもしれないが、少しばかり無理を強いた解釈と言わざるを得ない。むしろ、51~52 節のまとめ句があらためて置かれていることから、「天の国のたとえ」を終末論的な解釈で終わらせない意図が示されていると考えるべきなのだろう。

・52 節「天の国のことを学んだ学者は皆、自分の倉から新しいものと古いものを取り出す学者に似ている」は、解釈の難しい句である。まず、この句自体が「たとえ」形式になっており、「天の国のこと」を「たとえ」によって学んできたことと合わせたとき、二重の意味で、「天の国のことを学ぶ」ということが比喩的なものとして扱われ、明示的に解釈することを困難にしている。この句の直訳は、「…彼の宝物(庫)から新しいものも古いものも追い出してしまふ…」で、「悪霊を追い出す」という場合と同じ語(エクバロー)が用いられている。そこで、「汚れた霊が戻ってくるたとえ」(12:43 以下)との類比で解釈する可能性も考えられるのである。

**来週の誕生日 (8月29日~9月4日)****主日礼拝の讃美歌から**

・21-17 番「聖なる主の美しさと」(= I 7 番「主のみいつとみさかえとを」)は、19 世紀英国教会司祭モンセルが代上 16:29 に基づき公現日のための讃美歌として作詞。曲は、同時代の米国で知られた讃美歌作曲家シャーウインの作品。

- ・21-161 番「見よ、主の家族が」(= 39 番)は、詩編 133 の「見よ、兄弟たちが共に座っている。なんという恵み、なんという喜び」を歌うもので、ユダヤ教会の典礼歌の形式に倣った讃美。
- ・21-476 番「あめなるよろこび」(= II 150 番)は C.ウエスレーの代表的な讃美歌の一つ。『讃美歌 21』で改訳されている。曲は、ドイツ生まれでアメリカで活躍した音楽家ザンデルの作。日本では別の曲(475 番 = I 352 番)との組み合わせで歌われてきたが、476 番の曲や別の曲が近年は標準になっている。

**21-17「聖なる主の美しさと」****Worship the Lord in the beauty of holiness**

1. Worship the Lord in the beauty of holiness;  
Bow down before Him, His glory proclaim;  
Gold of obedience and incense of lowliness  
Bring, and adore Him: the Lord is His name!
2. Low at His feet lay thy burden of carefulness;  
High on His heart He will bear it for thee,  
Comfort thy sorrows, and answer thy prayerfulness,  
Guiding thy steps as may best for thee be.
3. Fear not to enter His courts in the slenderness  
Of the poor wealth thou canst reckon as thine;  
Truth in its beauty, and love in its tenderness  
These are the offerings to lay on His shrine.
4. These, though we bring them in trembling and fearfulness,  
He will accept for the Name that is dear,  
Mornings of joy give for evenings of fearfulness,  
Trust for our trembling, and hope for our fear.
5. Worship the Lord in the beauty of holiness;  
Bow down before Him, His glory proclaim;  
Gold of obedience, and incense of lowliness  
Bring, and adore Him: the Lord is His name.

**21-476「あめなるよろこび」****Love Divine, All Loves Excelling**

1. Love divine, all loves excelling, / Joy of heaven to earth come down; / Fix in us thy humble dwelling; / All thy faithful mercies crown! / Jesus, Thou art all compassion, / Pure unbounded love Thou art; / Visit us with Thy salvation; / Enter every trembling heart.
2. Breathe, O breathe Thy loving Spirit, / Into every troubled breast! / Let us all in Thee inherit; / Let us find that second rest. / Take away our bent to sinning; / Alpha and Omega be; / End of faith, as its Beginning, / Set our hearts at liberty.
3. Come, Almighty to deliver, / Let us all Thy life receive; / Suddenly return and never, / Never more Thy temples leave. / Thee we would be always blessing, / Serve Thee as Thy hosts above, / Pray and praise Thee without ceasing, / Glory in Thy perfect love.
4. Finish, then, Thy new creation; / Pure and spotless let us be. / Let us see Thy great salvation / Perfectly restored in Thee; / Changed from glory into glory, / Till in heaven we take our place, / Till we cast our crowns before Thee, / Lost in wonder, love, and praise.